



TITLE:

スタンダールのナポレオンⅡ
respecta un seul homme :
Napoléon. [Essais d'Autobiographie
(v)]

AUTHOR(S):

西川, 長夫

CITATION:

西川, 長夫. スタンダールのナポレオンⅡ respecta un seul homme : Napoléon. [Essais d'Autobiographie (v)]. Francia 1960, 4: 41-51

ISSUE DATE:

1960-07-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137464>

RIGHT:

スタンダールのナポレオン

Il respecta un seul homme : Napoléon.

[Essais d'Autobiographie (v)]

西 川 長 夫

序

(1)

《Mais, avant tout, il faut dire le grand rôle que la destinée de Napoléon joue dans l'oeuvre de Stendhal》と述べたゾラをはじめ、Bonapartisme がスタンダール文学の一つの支柱である事を見抜いた人は多い。しかしこの問題を正面から取扱った研究は少く、まとまった研究書は無いらしい。スタンダール研究の一つの弱点であろう。スタンダールにおける Bonapartisme 研究の序論として Bonapartisme の観点からスタンダールを見直す時に開けて来る新しい視野、諸問題を記したい。エゴチストと呼ばれる天才が民衆的民族的なものとつながり、強烈な個性とその時代が最も見事に結びつく一点としてこの視点は選ばれた。この視野は広く、文体論から思想的な位置づけまでを含むが、ここでは主としてスタンダールの Bonapartisme の構造ともいべきものを論じたい。

Bonapartisme 形成の過程を辿る事は、スタンダールの場合フランス革命の跡を辿る事である。革命—ナポレオン—スタンダール、この三者(角)の関係がスタンダールの Bonapartisme と、その基礎となる思想の形成をほとんど規定している。スタンダールは大革命の六年前に生まれ、二月革命の六年前に死んだ。彼の幼少年、青年、壯年、老年期はそれぞれ革命、ナポレオン、王政復古、七月王政の時代にはば対応するがスタンダールの思想の方向は幼少年期(即ち革命期)にはほとんど決定づけられたと思われる。

歴史に民衆が初めて主人公として登場する時期と、スタンダールの意識に初めて民衆が現われる時期は一致する。最初のフランス革命と呼ばれる「屋根瓦の日」、反抗する民衆は幼いペイルの胸に強烈な印象を刻み込んだ。スタンダールは後に、自分の古い半靴を手を持

ち力一杯《Je me révolte, je me révolte !》と叫ぶ老婆、銃剣で背中から刺された職人の姿を感動的な筆致で描いている。バステューはその一年後であった。幼いスタンダールは王党的な家庭に反逆して、熱烈な共和主義者となり、幼時の Julien と同じようにイタリアに向う龍騎兵の軍団を貪り眺めた。やがて祖国の裏切者 Louis XVI の処刑に狂喜したベイルであった。この共和主義者、愛国者としての特色は生涯変らない事をスタンダールは繰返し強調している。Stendhal égoïste の考えにとらわれて、彼の祖国愛を軽視する傾向が強いが、正しくないと思う。

この幼い共和主義者愛国者の意識にナポレオンは救国の英雄として現れてくる。ナポレオンが最初に認められたツォロンの攻囲は幼いベイルの関心事でもあった。その数年後ナポレオンがエジプトから脱出に成功した時の事をスタンダールは次の様に告白している。《Je m'accuse d'avoir eu ce désir sincère; Ce jeune Bonaparte, que je me figurais un beau jeune homme comme un colonel d'opéra-comique, devrait se faire roi de France.》(Henry Brulard, chap. 35) スタンダールの意識におけるナポレオンのこの様な登場の仕方は、後の Bonapartisme を決定する重要因子であろう。最初から革命と結びつきロマネスクな憧憬の対象であった。

このグルノーブル時代の保守的な家庭の圧制が、かえってスタンダールに、身近に進行しつつあったフランス革命を憧れさせたのであるが、この時期のスタンダールの教育の仕上げをしたのが École Centrale であったことは興味深い。École Centrale は 1795 年、動乱の最中に国民公会によって開設された。伝統的なクリスチ

アニスムの教育に抗して各県に新設され、合理主義を指導原理として無神論的傾向が強く科学を重視した。Destutt de Tracy, Cabanis 等イデオロークが重要な役割を果たしており、後のスタンダールのこれ等イデオロークに対する傾倒と無関係ではない。スタンダールは最初の入学者の一人であり、いわば大革命新教育の第一回生であった。彼の数学に対する愛好はベイルニスムの基礎をなす《L'efficacité pratique de la méthode.》即ち法則を知る事によって人は幸福になり得るといふ、科学的合理主義に対する信頼の象徴的表現であろうが、更に数学教師 Dupuy はかつてナポレオンを教えた事があり、その思い出を雄弁に語っている。

École Centrale における短期間の教育がスタンダールに与えた影響を量的に測ることは出来ない。しかしスタンダールの諸特徴とされる empirisme, matérialisme, rationalisme, républicanisme anti-christianisme, etc. が同く École Centrale の指導原理を支えるものであつてみれば、そのベクトルの方向は自ずと明らかである。それは結局フランス革命の精神を構成する要素であつたし、又ナポレオンの精神の諸特徴でもある。ここに二人の結ばれる可能性がある。ナポレオンは《Je suis soldat, fils de la Révolution》といつたが、スタンダールも又革命の子であつた。

十六才のスタンダールがブルジョワ的低俗の故に嫌悪した故郷を離れ、憧れのパリに出て来た時、革命は新しい段階を迎えていた。一七九九年十一月十日、それは霧月十八日のクーデタの翌日であつた。Daru 伯に伴われ陸軍省に入る。そこではマレンゴの戦が用意されてゐる。一八〇〇年五月七日、イタリアに向けて出発。《Ici commence une époque d'enthousiasme et de bonheur

parfait.》(Henry Bouliard, chap. 44) スタンダールの生涯はナポレオンの運命に密接に結びつけられる。サン・ベルナール、マレンゴ、ミラノ、ベルリン、モスクワ、シレジア……、そしてナポレオンと共に没落。

(2)

スタンダールのナポレオンに関する著作は二つあるがいずれも未完である。《J'écris l'histoire de Napoléon pour répondre à un libelle.》で始まる *vie de Napoléon* は一八一七—一八年、反動政治の厳しいミラノで書かれた。三年後炭焼党員の嫌疑をうけ身の危険を感じてパリに去り、残された原稿は手許に戻らなかった。

二十年後再び *Mémoires sur Napoléon* を書き始める。この間七月革命をはさんで世情は激変する。Le Mémorial de Sainte Héleine をはじめ多くの回想録が発表され、ナポレオンはその死によって伝説化する。スタンダールは五三才になった。激しいポレミックな調子は影を潜め、老兵として英雄時代と自己の青春を回想する。そこにはイタリアという魅惑的な国に於けるスタンダールの青春と若い英雄の面影が混同されて語られている。この作品も同じく最初から Bonapartiste の立場を表明している。《J'éprouve une sorte de sentiment religieux en osant écrire la première phrase de l'histoire de Napoléon. Il s'agit (en effet) du plus grand homme qui ait paru dans le monde depuis César.》二十年を経てナポレオン支持の情熱の強さと基本的な態度はほ

んと変っていない。この二つの作品からナポレオンの歴史的行動の転機を示す主要な事件に関するスタンダールの見解を追っていくと単なる自由主義者、共和主義の概念では理解されない彼の一面が見出される。スタンダールの批判はナポレオンの野心が despotisme の形をとった事に向けられており、それに限られる。敗北の原因もすべて結局は despotisme の欠陥に帰せられる。スタンダールは Le 13 Vendémiaire からイタリア戦役迄を完全に支持し、特にイタリア戦役に関しては次の様に記している。《C'est une grande et belle époque pour l'Europe que ces victoires d'une jeune République sur l'antique despotisme; c'est pour Bonaparte l'époque la plus pure et la plus brillante de sa vie.》情熱的熱狂の対象となり得る時期はベニス占領で終り、それ以後個人的利害の混入を指摘しているが、それが明確に現れてくるのはエジプト遠征である。しかしこれも despotisme に対する闘いの一環として結局は支持されている。(1)総裁政府の無能と腐敗。(2)ブルボン復活の危険。(3)第二のポーランドとなる危険。共和国フランスを守る為にナポレオンの天才を必要とし、彼はその役割を果たした。明確な批判が加えられるのは帝政からである。

しかしロシア戦役をはじめナポレオン戦争はほとんど支持され、一八〇四年以後は専制主義を非難しつつもナポレオンを支持する複雑な形をとる。戦争の愚劣を認めつつも反戦論であり得ない。それはヨーロッパの情勢を「républicain か despotisme か」の二者択一の立場で理解したからであらう。despotisme は祖国フランスであり革命で勝ち取った liberté と同義である。despotisme はブルボンを支持し革命を否定する勢力であった。スタンダールは書いてい

る。《La nouvelle république française ne pouvait vivre qu'en s'environnant de républiques.》、《Il était chimérique de croire à aucune paix solide entre la nouvelle république et ces vieilles aristocraties de l'Europe.》。しかもナポレオンの侵略はフランス人にとって圧制に悩む他民族の解放を意味した。これがナポレオン支持の根本理由であり、ここから nationalism が生れる。

cosmopolite として有名なスタンダールに nationaliste の概念を導入することは人を驚かせるかもしれない。しかし《La patrie avant tout》の言葉、或いはテーマが *Origine* のなかで偉大な観察者の文章として引用して「近くは C. J. H. Hayse がやはり *The Historical Evolution of Modern Nationalism* 中 “Jacobin nationalism” の章で引用しているスタンダールの革命期 nationalism を述べた文章 (Mémoires sur Napoléon chap. 1) に目を止める時、もはや nationalism の問題を避けて通ることは出来ないであろう。Henry Brulard の《Les bataillons d'Espérances》のエピソードもこの熱狂的な民族感情を裏付ける良い例であろう。この思想と感情はフランス革命特有のものでありロベスピエールと革命期ナショナリストに共通しているが、次の世代スタンダールにもかなりはつきりした形で受け継がれ、その根底には共和主義に対する熱狂と旧制度に対する反感がある。《Utilité à la patrie》の原則によつて、ナポレオンが、客観的には侵略戦争と見なされているもので、強力に支持されているのはこの理由による。

生涯における感受性の最も鋭く豊かな時にスタンダールはこの民

族的な熱情のただ中で生きたのだ。この熱狂にスタンダールが直接身を晒すのはあのイタリアに於て、しかも最も熱狂的なナポレオンの兵士の中である。スタンダールの最も良き時代はナポレオンの時代であり、スタンダールの青春、それはフランス民族の青春であり確信とエネルギーに満ちた時代であった。この感動が *La Chartreuse* の最初の頁を形成する。スタンダールの《*l'énergie*》の問題もこの民族的熱狂と無縁ではなく、その一つの変形としての一面を持つている。

スタンダールは民族的熱狂に盲目的に身をまかせたのではない。nationalisme が chauvinisme や militarisme に転化する危険を知っていた。彼は共和主義と祖国に対する熱狂が専制主義のエゴイズムに墮落していく過程をナポレオン没落の過程として描いている。熱狂的な国民感情を利用することからはじめたナポレオンであったが、despotisme はこの感情を必然的に墮落させブルボンへの道を開いた。スタンダールは痛烈にこれを叩く。しかし厳しい批判にもかかわらずスタンダールがともすればナショナリズムの方向にひかれるところに民族感情の根強さがみられよう。それは彼にとって快く懐しいものであった。Lucien Leuwen の一人物は次の様に叫んでいる。《Quelle différence de 92 à 1831! (...) comme alors nous jurions haine à la royauté! Et de quel coeur! ... Alors on se battait tous les jours; le métier était agréable, on aimait à se battre》(chap. 3)

こうした共和主義を守る為に、独裁者ナポレオンを支持せざるを得ない歴史的條件、更にそれが強烈なナショナリズムを背景としている状況の複雑さが一層スタンダールを矛盾多いものにみせている

が彼の態度は一貫しているのである。スタンダールの Bonapartisme を複雑にしているもう一つの要素としてナポレオン自身の二面性があげられよう。ナポレオンには王政復古を準備する一面と共にフランス革命が生きている事を認めねばなるまい。少くとも社会革命としてのフランス革命には忠実であり、ウィーン会議の正統王朝主義者達をはじめとし、保守派の目には大革命の化身であった。スタンダールの Bonapartisme を指摘する事によって彼の共和主義を疑うのは早計である。

(3)

Hayse にすれば Jacobin nationalism から Jacobin militarism の方向を辿った民族感情は一八一四年を契機としていかなる変貌を見せたか。一八一五年の直後に最も激しかった charvinisme litteraire の存在は注目に値する。民族の野心はナポレオンと共に挫折したがせめて知的優位だけは確保したい、愛国的願望の表現であった。政治色の強いロマン主義運動には反動勢力に抵抗する流れもあった。タルチュフは Jesuites に当てつけて演じられ、ナポレオンを懐しむ作品も喜ばれた。二十一年には *«Non, non, Britannicus est mort empoisonné»* の台詞が喝采された。反英色は強く、二十二年にはサンニマルタン劇場の事件が起きた。スタンダールは *Racine et Shakespeare* でこの charvinisme に反抗したが作品を通じて反英的な調子は否めない。元来革命とナポレオン戦争を契機としたナショナリズムはロマン主義と一身同体のものであったが一八一四年代からスタンダールの死に到るまで、即ち彼の

作品の大半が書かれた時期の国民感情の主流となるべきものをナショナリズムの変形としてのロマン主義と考えたい。

《*Le tombeau avec Napoléon en avril 1814.*》(Henry Brulard, chap. 2) という言葉の意味は深い。歴史的挫折、あるいは民族的挫折と呼び得る。フランス国民のエネルギーが集中的に最も見事に発揮された一つの輝かしいドラマがバステイユの勝利に始まり、ワテルローの敗北として終る。スタンダールの云う様に、一つの偉大な国民が王を変えするためでなく、自由の為に戦った崇高な世紀があった。英雄的な熱狂。輝かしい勝利と栄光。それだけにみじめな敗北。 *De l'amour* の契機となった Méthilde に対する怒の挫折とは違ふ、歴史的な抗がりを持った国民的感情である。ナポレオンの挫折はフランス国民とスタンダールの挫折であった。一八一四年以後国際的地位は低下の一途を辿る。露骨な反動政治が挫折感を強める。挫折の時間を経てナポレオンは英雄時代の国民的シンボルとして復活する。

スタンダールの Bonapartisme の芸術がそこから出発する。発想の契機が偉大な歴史的事件である事が芸術の規模を大きくする。ルカーチはフランスロマン主義のうちに、英雄時代の消滅を悲しむ心と小売商人のようにこせついてしまった現在の代りに大いなる情熱の輝かしい規範を求める絶望的慾求を指摘しているが、スタンダールの芸術の一つの鍵は彼自身も告白しているように (Henry Brulard chap. 9) *romanesque* と *basse bourgeoisie* を対立させるやりかたにある。その *romanesque* を構成するのは英雄的な諸要素であり *espagnolisme* と *italianisme* がその中核を占める。この英雄的な諸要素をスタンダールはナポレオンに求めた、或いは

見出した。スタンダールの人物はナポレオンに酷似する。これはスタンダールのごとき思想と生活を持った人間がロマン主義の欲求に身を晒す時当然の帰結であつた。ナポレオンを核としてスタンダールの芸術が結晶するとはこの意味に於てである。

(4)

ジュリアン・ソレルのナポレオンが夢想の対象であると同時に行動の規範として現れたところにロマン主義の日付がある。

Le Rouge は王政復古の時代に、一人のナポレオンになる事を試みた貧しい一人の青年の物語である。その Bonapartisme は民衆の Napoléon 伝説の高められたものでありほとんど彼の階級に固有のものと云えよう。闘争の過程に於て強められた上流社会と金持に対する反感はやがて次の様な形をとる。《Moi, pauvre paysan de Jura, (...) moi, condamné à porter toujours ce triste habit noir ! Hélas ! vingt ans plus t, j'aurais porté l'uniforme comme eux !》重要なのは二十年前なら俺も、という考え方である。大革命が初めて民衆にこの考えを許し、ナポレオンの競争心の政策がこの意識を強めた。ナポレオンの將軍の多くは彼等の階級から出た。更にジュリアンと民衆を慰め力づけるのは、コルシカに生れ貧しく名もない中尉が自らの力で皇帝となり、ヨーロッパを支配したという事実であつた。ジュリアンが立聞きした石工達の会話はこの民衆の Bonaportisme の構造を明確に示している。

《— Dans le temps de l'autre, à la bonne heure ! un maçon y devenait officier, y devenait général, on a vu ça...

— Qui est né misérable, reste misérable et viâ.

— Ah ça, est-ce bien vrai ce qu'ils disent que l'autre est mort ! ...

— Ce sont les gros qui disent ça, vois-tu ! l'autre leur faisait peur.

— Quelle différence, comme l'ouvrage allait de son temps ! Et dire qu'il a été trahi par ses maréchaux !

Faut-y être traître ! (chap. 29)

ジュリアンはいふ。《Le seul roi dont le peuple ait gardé la mémoire》ジュリアンと彼等の Bonapartisme は基本的に同じである。この民衆に共鳴するが手を取り合うことが出来なかつたところにジュリアンの悲劇があつた。

ナポレオンは多くの点で民衆を裏切つたが民衆の願望は結晶する一つの核を必要とした。スタンダールはこの民衆の伝説を見事に捉えた。Bonapartisme はジュリアンの階級に限られていたわけではない。しかし貧しい階級の感情とそれを結びつけて描く事によつて階級の問題を明確に提示し得た。彼は王政復古の愚劣とナポレオン時代の英雄的ロマネスクを対照的に描く事によつて、読者を革新の時代へ誘う。ナポレオンは独裁者ではなく革命と英雄時代のシンボルとして意識される。スタンダールは語っている。《Le peuple, que Napoléon a civilisé en le faisant propriétaire et en lui donnant la même croix qu'à un maréchal, le jige avec son cœur, et je croirais assez que la postérité confirmera l'arrêt du peuple》(Mémoires sur Napoléon, préface) Le Rouge is Bonapartisme の小説である。この Bonapartisme is Stander のものと共に同時代の民衆の感情であつた。ス

タンダールと民衆とが最も接近し得たのはこの Bonapartisme においてであつた。

(5)

スタンダールの二つの Napoléon の小説化されたものが *La Charteuse* であるという印象が強い。我々は既に *Italie-Napoléon - jeunesse* が密接な關係を有し、スタンダールのイデーのコンテクストを形成している事を知っているが、ここでは特に目立つイタリアニズムと政治學の問題を取上げたい。*M. moires* の青春讃歌は *La Charteuse* に引継がれている。*Lacien Leuwen* のブルジョワの世界にあいたスタンダールが、*Mémoires* で気晴しを試みたとする説も充分うなずける。スタンダール自身「*J'avais trop de plaisirs à parler de ces temps heureux de ma jeunesse.*」とバルザックに語つてゐる。これは *La Charteuse* の冒頭の頁に關するものであるが、*Mémoires* の方に一層適切であらう。*M. moires* のうちでも特に *La Charteuse* に親近性を示す章は、*ラノ*を取扱つた第七章であらう。この章は *La Charteuse* のロマンの発端をなす Robert 中尉のエピソードから初まる。美しい伯爵夫人邸に宿舎を割当られるところから給仕に一枚しかない六フラン銀貨を握らせる点にいたるまで話の骨組は全く同じである。「*Si les Miliains étaient fous d'enthousiasme, les officiers français étaient fous de bonheur, et cet état d'ivresse continu jusqu'à la séparation. Tous aimaient la musique (...). Ce fut le plus beau moment d'une belle jeunesse.*」(chap. 7) このス

タンダールの若い時代の思いが籠められたロマネスクな瞬間にロベール中尉の物語を置いて考えよう。イタリアの美しい伯爵夫人とナポレオン軍の若い中尉の恋、それがファブリスの出生と性格の秘密を説明する。スタンダールの夢想はきつとこういう方向に向けられたであらう。*La Charteuse* の成立事情としてファルネーゼ家の物語とワテローの結びつきに重点をかけることは、重要ではあるが、しかし先ず第一に *La Charteuse* と *M. moires sur Napoléon* (制作年代はほぼ一年半をへたづけている)とのつながりにおいて考え、そのロマンの発端をロベール中尉の美しいエピソードに出す事が自然な思考であらう。そのロマネスクな秘密を持ったファブリスがナポレオン帰還の報を聞いてフランスに駆けつける。「*Tout à coup, à une hauteur immense et à ma droite j'ai vu un aigle, l'oiseau Napoléon; il volait majestueusement se dirigeant vers la Suisse, et par conséquent vers Paris. Et moi aussi, (...) j'irais offrir à ce grand homme bien peu de chose, mais enfin tout ce que je puis offrir, le secours de mon faible bras. Il voulut nous donner une patrie et il aima mon oncle.*」(chap. 10) *Le Rouge* の有名な雫の飛翔に比較される文章である。彼等の夢がナポレオンの翼に乗って大空高く輪を描く。*Moi aussi.* ここに彼等の行動の契機がある。スタンダールの小説はここから始まる。ファブリスをロマネスクに誘う Bonapartisme に、祖国愛と肉身の思いが結びついていた。こうしてファブリスはワテローに赴く。それとは知らず今は將軍となつたロベールに出会う。スタンダールは巧妙である。ファブリスはこの將軍に馬を取られ「泥棒！泥棒！」と叫んで戦場を走る。

ミラノ入場、グロの漫画、Equus 云々の教育論これ等 LaChartreuse の興味あるエピソードをすでに Mémoires に書かれている。

ホメロスの最も美しい歌と比較される冒頭の頁の叙事詩的性格の理解には Bonapartisme からのマブローチが有効であろう。それはフランス革命軍の詩であり、十七才の龍騎兵少尉スタンダールが初めてイタリアの空気に触れた時の感激の思いが籠められている。最も完全で理想的な青春の観念とイマージュが描かれている。一つの民族が同じ体験に身を委ね、しかもそれが幸福な体験であるのは素晴らしい。この幸福は彼等が共通した確信を持ち同じ熱狂に躊躇なく身を委し得たことによる。歴史がこの幸福を許すことは稀である。フランス革命期ナショナリスムの特色であった。

スタンダールの Italianisme の出発点をここに求めよう。スタンダールはナポレオン自身の性格にイタリア的要素を強調している。『*Vie de Napoléon*』の結論は一言でいえばナポレオンは十九世紀のタイラントであるという事である。これをよく理解するには十四世紀のイタリアのタイラントを知らねばならぬとつけ加えるのであるがこの考えは Mémoires の方で更に展開される。

《Suivant moi, on ne trouve d'analogie au caractère de Napoléon que parmi les *condottieri* et les petits princes de l'an 1400, en Italie : (...) Hommes étranges, non point profonds politiques, dans le sens où on l'entend généralement, mais, au contraire, faisant sans cesse de nouveaux projets, à mesure que leur fortune élève, attentifs à saisir les circonstances et ne comptant d'une manière absolue que sur eux-mêmes. Âmes héroïques nées dans une siècle où tout le monde cherchait

à l'aide et non pas à écrire, inconnues au monde, (...) et expliquées seulement en partie par leur contemporain Machiavel.》(chap. 1) この Napoléon の性格はスタンダールが繰返し描いた主人公の性格に共通した基本的なものとなっている。Irving Howe が Gina を《A romantic who personifies the Napoleonic principle in personal relations》と評しているがスタンダール人物の本質をつく言葉であろう。個人的関係に関する限りスタンダールのナポレオン支持は絶対である。ナポレオンをタイラントと評する時でも《Qui dit tyran, dit esprit supérieur.》と云っている。後にテームスが最上の讃辞としてこの言葉をスタンダールに捧げるであろう。

オレンジの茂っている国に対する憧れと《Je suis peut-être de sang Italien》という自覚はナポレオンに対する憧れと共に幼時からのものであった。この二つはイタリア戦役を契機として結びつき、あの熱狂的な青春時代に成長した。ナポレオンはイタリアのシンボルとなる。イタリアはそれに相応しい国であった。

スタンダールはナポレオンを中世或いはルネッサンス期のイタリアのタイラント、庸兵隊長、小君主達と比較しているがこの考えは既にスタール夫人が指摘し、テームスに受継がれる。originalité の問題は別としてここではナポレオンと中世の君主、ナポレオン時代と中世を Machiavel という要素を加えて結ぶ思考方法が La Chartreuse の構成を決定づける要因であった事を指摘するに足るだろう。

Balzac が《Enfin, il a écrit La Prince moderne, le romanesque Machiavel écrivait, s'il vivait dans le siècle où tout le monde cherchait

と書いているが卓見であろう。君主論はスタンダールの愛読書であった。マキャベリは一般に誤解されている。彼は権謀術策を主張すると共に、幸運の女神は無鉄砲な若者に味方する、と書く一面があった。又民衆の力を高く評価し、君主国より共和国の優位をほめめかす民主的思想を持ち熱烈な愛国者であった。これだけの特色を具えたものとしてスタンダールのマキャベリスムは理解されねばならない。中世イタリアの歴史も多くの場合マキャベリによって知った。スタンダールのナポレオンは君主論に描かれた理想の君主に近い一面を持っている。ところがスタンダールの思想には独裁制は必ず墮落し崩壊するという確信があり、結局君主としては否定的にとらえる事になる。この一見矛盾とみられるものの萌芽は既に君主論にあった。

一般に *La Chartreuse* がマキャベリックな小説であると云う時それが専制政治を極めて典型的に描き出していることを指摘しているが、この *Mémoires sur Napoléon* と *La Chartreuse* は連結している。スタンダールは《J'ai fait le prince d'après la cours de Saint-Cloud, que j'habitais en quelque sorte en 1811》(Lettres à Balzac) と書いてゐるが、この墮落されがちな言葉は重要である。これはスタンダールのナポレオン論と *La Chartreuse* を比較研究することによってかなりの程度実証され得る。

スタンダールはナポレオン敗北の原因を次の二つに要約している。(i) *L'amour qui l'avait pris pour les gens médiocres, depuis son couronnement*, (ii) *La réunion du métier d'empereur à celui de général en chef*. 最初の理由は専制的な権力が個人にもたらす墮落である。権力と共に彼を取まく阿諛が知性を曇らせ、人間がそれに

対していかに弱いかをスタンダールはナポレオンの実例によつて知った。ナポレオンが才能と気骨ある人士を退け、阿諛追従の廷臣に取まかれる事によつて自滅した事をスタンダールは絶えず強調する。

専制政治の象徴は警察と宮廷である。Fouché の名で示される恐怖政治の原理を、我々は Rassi の警察と Fautsch の塔に見てであらう。ナポレオンのジャコバンに対する恐怖と Ernest W. のそれを比較するのは無理であらうか。太公も戦場では勇猛な將軍であつたが、ジャコバンの名を聞く幼児のように震え上る。この恐怖は専制君主の傲慢に対する心地よい報酬である。

精神の自由と活気が失われ、偽善と虚栄の空しい華かに満ちた太公の宮廷のアンニュイを、スタンダールは既にナポレオンの宮廷に見出してゐた。彼はナポレオンの皇帝としての生活を《*La comédie grave*》と評している。

専制政治の恐怖は、すべてが一人の君主の恣意にかゝつてゐることにある。人民の生命は彼の掌中にあり、危険は権力の近くにゐる者ほど大きい。Mosca の哲学は生きぬく事が最大の問題である時代に生きたスタンダールのマキャベリスムを反映している。(彼もまたナポレオンと共に没落したナポレオン軍の熱狂的な勇士であつた。) 太公が悪人として描かれず、本来善人なのだが……と強調されているのは注目すべきである。これは君主の地位と環境が人間を変化させるのであつて、彼が独裁者の性格をもつて生れたのではないという主張に基づく。ナポレオンにしろ Ernest W. にしろ、その墮落は個人的でなく despotisme の制度に固有のものであることを強調することによつて despotisme 批評はいつそ力を強める。

ナポレオン挫折の第二の理由はナポレオンがはじめて巨大な官僚

制を中心につつ近代的な政治機構と、一個人の能力にすべてをおう独裁という旧式な方法との矛盾をついている。これは十六世紀の人マキャベリーも知り得ず *La Chartruse* にも導入されない要素である。パルムという小国を選んだのは秀れたやり方ではあったが、一つの犠牲を強制した。

スタンダールは体験として *Saint-Cloud* で *Prince* を学び、イデーとしてナポレオン論で展開した。二つのナポレオンは *Bonapartisme* を中心に結晶した青春讃歌と *despotisme* 研究の書であった。そのより高度な芸術的表現が *La Chartruse* である。現実の基盤と、このような準備があつてこそ偉大な傑作が生れたのではなからうか。

(6)

スタンダールの進歩的性格は彼の *Bonapartisme* にかなり明確に現われているが、最後に彼の政治思想に一応の方向を与えておきたい。

ナポレオン崇拜の他にスタンダールの保守性を示す次の二点が指摘されている。(1) 民衆に対する嫌悪と貴族趣味。(2) アメリカ共和制に対する否定的態度。(1) の例として *Henry Brulard* の *Saint-André* 寺院のジャコバンに関する記述がよく引用される。民衆を支持するが、その卑俗と不潔に耐えられないという主張も幾度か繰返されている。しかし民衆の欠点を見出し嫌悪しつつも、彼は民衆の名においてその幸福を追求し、民衆の幸福の為にはいかなる事も辞さないことを明言しているものであつて、ここからデモクラシーに対する嫌悪を導き出すことは出来ない。しかも

スタンダールは単に嫌悪したのではなく民衆に多くの美点を見出し汚ない、代りにエネルギーを有する単純卒直で愛国的な唯一の階級として共感を抱いている。これを理解しないと彼の小説に多くの民衆が非常に好意的に愛情をもつて描かれている説明が出来ない。スタンダールの民衆的 *Bonapartisme* につながる側面である。

だがスタンダールが貴族趣味を持っていた事も疑えない。前向きの思想と後向きの趣味、頭と心情の背反はスタンダールの一つの限界である。自ら指摘する様にこれは彼の属する階級と教育に帰せられるものである。スタンダールはこの *désirs contradictoires* を自己の欠点と意識し、小説においても度々問題にしているが結局解決していない。

この分裂はアメリカ共和制を考える時にも現われてくる。この場合にも彼は共和制に移行する歴史的必然とその思想としての正しさを充分認めつつも反撥している。彼がワシントンよりもタレイランを選び、アメリカの市民生活より墮落した宮廷を好むと書く時、単なる貴族趣味では片附けられないブルジョワ根性に対する激しい嫌悪の表明がある。五大小説中、七月王政のブルジョワ貴族階級を取扱った *Lacien Leuwen* にアメリカ嫌いが強く示されている。七月革命の期待が無残に蹂躪られ、彼の嫌悪するブルジョワジーが歴史の主導権を確立した時、アメリカのブルジョワと衆愚政治が我慢ならないものとして強く意識された。(そこでアンチデーゼとして想起されるのはやはりナポレオンであつた。)

ジャコバンに我慢ならないと云つた時ジャコビニスムを否定したのではないように、アメリカを嫌悪する時、共和制とそれに固有の美德を否定したのではない。彼は歴史の未来を信頼したが、明確な

未来図を描き得なかった。彼の階級と生きた時代の限界であらう。だが根本において、少くとも思想的には、ジャコバンの民衆を支持し、共和制を支持していた。

スタンダールは歴史の進歩に従って三つの政治形態を考えた。(c. Vie de Napoléon. Chap. 86) ナポレオンのそれは第二段階の最上のものと考ええる。もちろん第三の言論出版の自由に支えられた代
表制民主主義が理想であり、ナポレオンを支持したのは与えられた
歴史的条件の中で許された最良のものとしてである。スタンダールの
歴史観の根底には革命時代の指導者達の間を受継いだ進歩の確
信がある。彼の共和主義思想はこの進歩の確信に支えられて強固に
なる。《Je crois que si jamais il devient sérieux et qu'il veuille
raisonné, il sera républicain.》と主張したスタンダールにとって
共和主義を選ぶことは必然であり誠実さの問題でさえあった。

(結 び)

スタンダールの Bonapartisme の構造の外枠をなすものは一七
八三―一八四二年の日附である。同じ日附を持った世代の中
でも典型的な生涯であった。École Centrale で学び Jacobin-
nationalisme からロマン主義に到る激しい民族感情のたた中で生
きた。この動乱と激情の時代にあつて彼の思想と感情はナポレオン
という核を中心に結晶する方向を辿った。

スタンダールの Bonapartisme は専制君主達の攻撃から祖国を
守る愛国者、若き將軍ボナパルトに対する少年の憧憬から出発する。
ロンバルディアの沃野に解放の喜びをもたらすイタリア戦役の將軍
ナポレオン。スタンダールはあの熱狂的なイタリアにおいてナポレ

オン軍の兵士であつた。こうして最初から革命と結びついたロマ
ネスクな形成のされ方は、後にナポレオンの専制主義が激しい非難
に晒されるとはいえ、Bonapartisme の構造に決定的に作用した。

この Bonapartisme の形成は敗北を経て歴史的民族的挫折感が
支配したロマン主義の時代に完成した。この事情がそのロマネスク
な性格と英雄的な時代への回帰の傾向を一層強めた。

スタンダールのナポレオン批判はナポレオンの野心が専制主義の
形をとり共和国の没落をまねいた点に向けられる。この批判は強烈
である。従つてナポレオンの二面性は彼を独裁者とその厭うべき諸
属性のシンボルとする可能性もあつたが、ナシヨナリズムとロマン
主義の欲求がそれを許さなかつた。挫折の時間を経てナポレオンに
まつわる輝かしい思い出は一層身近く鮮明に意識される。民衆のナ
ポレオン伝説が生れスタンダールはそれに近づく。同じ偉大な歴史
的体験を経、共に戦い共に没落したスタンダールにしてみれば、こ
れは当然な成行であつた。

Bonapartisme が過去の栄光への憧憬を基本としている事は変ら
ない。しかしスタンダールの生涯とその時代の特殊性は彼の
Boapartisme に特殊な構造を与えた。次の三点を認める事が必要
である。(1) フランス革命につながる革新的性格。(2) Italianisme
につながるロマネスク。(3) 民族感情につながる民衆的性格。

(註)

(1) マルクス主義の定義を除いてまだ Bonapartisme には明確
な定義が与えられていないらしい。ここでは「ナポレオンの行動
(政治、軍事、私的 etc.) と人間性に対する共感、好意を含ん
だ態度」と定義しておく。